

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0003 福岡市中央区春吉
1-16-8 VEGA 天神南601号
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.141

2019年9月25日

〈URL〉 <http://www.peshawar-pms.com> 〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



〔写真〕 用水路通水の小さな目撃者たち（2005年3月4日）

「緑の大地計画」を希望の灯に

中村 哲

24時間、無料で診察します

ハフィズ ウラー

職業トレーニングに感謝

ヤール モハマド

貧しかった少年時代と現在

ディダール ムシュタク

地域住民のために暑さを忘れて働く

モハマド ファヒーム シェルザド

アフガン訪問記

谷津賢二

用水路と女性たち

中村 哲

【カラー特集】 ハチミツの初収穫が行われました！

【カラー連載】 マルワリード用水路に行く③D地区（1600～2350m 地点）

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

「緑の大地計画」を希望の灯に 農地を回復する動きが本格化

PMS (平和医療団・日本) 総院長／ペシャワール会現地代表

中村 哲

みなさん、お元気ですか。

今年の夏は日本で長く過ごし、台風や集中豪雨を目の当たりにし、温暖化がアフガニスタンだけの問題でないことを実感しました。以前にも報告したように、「降雨の偏在」が共通する顕著な現象です。日本の予報は驚くほど精細で、「線状降水帯」という言葉も、広く知られるようになりましたが、おそらく類似のことがアフガニスタンでも起きています。アフガニスタンの場合は、大気中の水分の絶対量が少ないので、降水の偏在は、大部分の地域で少雨をもたらし、干ばつの危機が日常化していると言えます。

二〇一九年秋・冬の仕事

カマの二つの堰せきの改修が一段落し、焦点は今冬の工事に移ってきました。大きなもの

は、マルワリード堰の改修とカチャラ堰(マルワリードII)流域の護岸工事最終点です。事業内容について、概要を説明します。

灌漑事業かんがいの大きな流れは、二〇〇三年に始まった「緑の大地計画」が予定通り区切りを迎えます。初期はマルワリード用水路に力が注がれ、二〇一〇年前後からほかの取水堰の研究と建設が主な努力の対象となりました。前者は完全にペシャワール会の支援まかによって賄われ、後者はJICA(国際協力機構)共同事業として実施されました。マルワリード用水路の開通は二〇一〇年でしたが、その後も排水路整備や植林などが継続され、現在に至っています。この間、安定灌漑地域を広げ、日本側の粘り強い支えで、ジャララバード北部の穀倉地帯復活が現実のものとなりました。



マルワリード用水路を取水門から眺める。用水路床を改修したことにより、流速が増した(2019年6月18日)

二〇二〇年までに目標を達成した後は、「二〇年継続態勢」を目指し、水利設備維持、PMS方式取水設備の普及、農業計画が連続して行われます。

設備維持は、この十六年の間の不備を補い、改修のやり方も伝えながら、地域への譲渡を実現することです。維持方法の伝授は、ある意味で建設以上に重要です。また、「緑の大地計画」の成果をきちんと示すことで、他地域の人々の励みと希望になり、普及事業を確実にすることを意図しています。普及事業は、FAO(国連食糧農業機関)

1. 新規取水・灌漑事業（施工中）

2016～20 カチャラ堰（マルワリードⅡ）

2. 既設の設備の維持

2017～19 カマ堰改修

2018～20 マルワリード堰改修

3. PMS方式の普及

2017～20 訓練所での研修、候補地の調査

2019～20 方式の標準化

4. 農業（ガンベリ農場）

オレンジ集荷態勢

養蜂（蜂蜜生産）、乳牛など

らと協力、政府の技官や地域指導者を対象に実地研修を行うと共に、主に隣接地域で次の堰・水路建設候補地の選定、調査を行うものです。将来的にPMSの参加する新規事業になる可能性もあります。

PMS方式は優れて地域性が濃いのが特徴です。誰でもできるように標準化するのが理想的ですが、河道特性に合った設計、地域の協力という点が最も重要です。そこで、JICAとの共同事業として「灌漑事業ガイドライン」の作成が進められる予定になっています。

なお、「緑の大地計画」全体の調査（社会

的効果および技術上の評価）が終わり、結論も出揃ってきているので、詳細を次号で紹介いたします。

農業は今年から明確に「経営」を意識し、現地PMSの経済的自立に役立てることを目指しています。そのために、オレンジ園の整備と養蜂の準備が今年の大きな仕事になっていきます（注1「養蜂について」参照）。

河川工事・冬の陣

低水位期の河川工事では、やはり、①マルワリード堰（連続堰）改修と、②カチャラ堰（マルワリードⅡ）流域護岸の八km地点（ミラオン堰上流）の河道安定工事が大物です。既に石材の蓄積が始められています。調査を重ねたうえ、あまりに大規模で無理な場合は、いずれかを一年延期して当たります。

マルワリード堰については、取水門の拡張、鉄筋コンクリート製の砂吐きの設置、四・八km地点までの水路の再ライニング（水路床覆工）を目指します。これは、昨年秋の集中豪雨被害の復旧を兼ねると共に、同流域の水稲栽培が盛んになって不足気味になってきた水量を増す目的もあります。改修というより、一つの大きな計画なので、「カマ堰改修」と同様、州政府に申請し、全面的にペシャワール会の支援で行わ

れます。マルワリード水路流域はシェイワ郡三、五〇〇ヘクタールの命綱です。他の小さな堰のある河道が不安定で、将来途絶える可能性もあり、万全を期すべきだと考えます。

ミラオン堰上流の河道安定は、原理的には筑後川の恵利堰（山田堰の下流）に先例があり、目下調査中です（注2「ミラオン堰上流の河道安定」参照）。

川からの取水、灌漑の仕事はキリがないものですが、以後の工事はなるべく政府技官たちも実習で参加、研修にも役立てたい



タハール、バグランなど北部4州から来た研修生の技官20名。初めて経験する実地研修に興味が見えなかつたようで、「実例があることが何よりも励みと希望になる」と口々に述べていた。

（2019年4月14日）

と考えています。

少しずつではありますが、この「緑の大地計画」を範として、農地を回復する動きが本格化しているようです。我々としては、東部で唯一ともいえる希望の灯を護ると共に、何とかこの流れを定着させ、祈りをあわせて飢餓の現実に対処したいと思えます。重ねて、これまでの長期かつ多大なご支持に感謝申し上げます。

〔注1〕養蜂について

養蜂業は、干ばつで下火になっていたが、PMS作業地（「緑の大地計画」領域）で再び活発化している。

アフガン特産はピエラの蜂蜜だが、三〜四月のレモン・オレンジらの柑橘類、五〜六月のユーカリ、九〜十月のピエラと、三期にわたって純粹に近い蜜が得られる。蜂の種類はイタリア産のセイヨウミツバチで、病気を除けば日本のスズメバチのような天敵はいない。一部に野生化が見られ、ニホンミツバチの近縁在来種と混在する。

ガンベリ農場の西北端にあるピエラの森の近くに巣箱が置かれる。幹線道路から3km外れ、涼しい場所にあり、農場では農薬を全く使用しないため、安全性が高いと思われる（日本の場合、柑橘類の蜂蜜が出回りにくい理由は主に農薬

使用による）。

既に今年の四月に試験的に五〇の巣箱を設置、二カ月間で約三〇〇kgのユーカリの蜜を得ている。巣箱は六月中旬からドラエヌールの涼しい場所で夏越しさせ、九月中旬からはピエラの集蜜が始まる。ガンベリ農場周辺（巣箱から半径約1kmの範囲）の柑橘類はオレンジを筆頭に約三万本、ユーカリは約一〇万本、ピエラは約四、五〇〇本で、蜜源の花は十分。ピエラは沙漠に自生する灌木で、砂防林の一部として農場に植えられたもの。

将来的に大きな増産が可能と見ており、日本への販路も期待される。

ミツバチの管理だけでなく、製品化の課題もあり、今後一年をかけて研究、試験生産する。現地には昔から養蜂家集団の国境を越えた協力関係があり、PMSも協力を得る。

〔注2〕ミラーン堰上流の河道安定

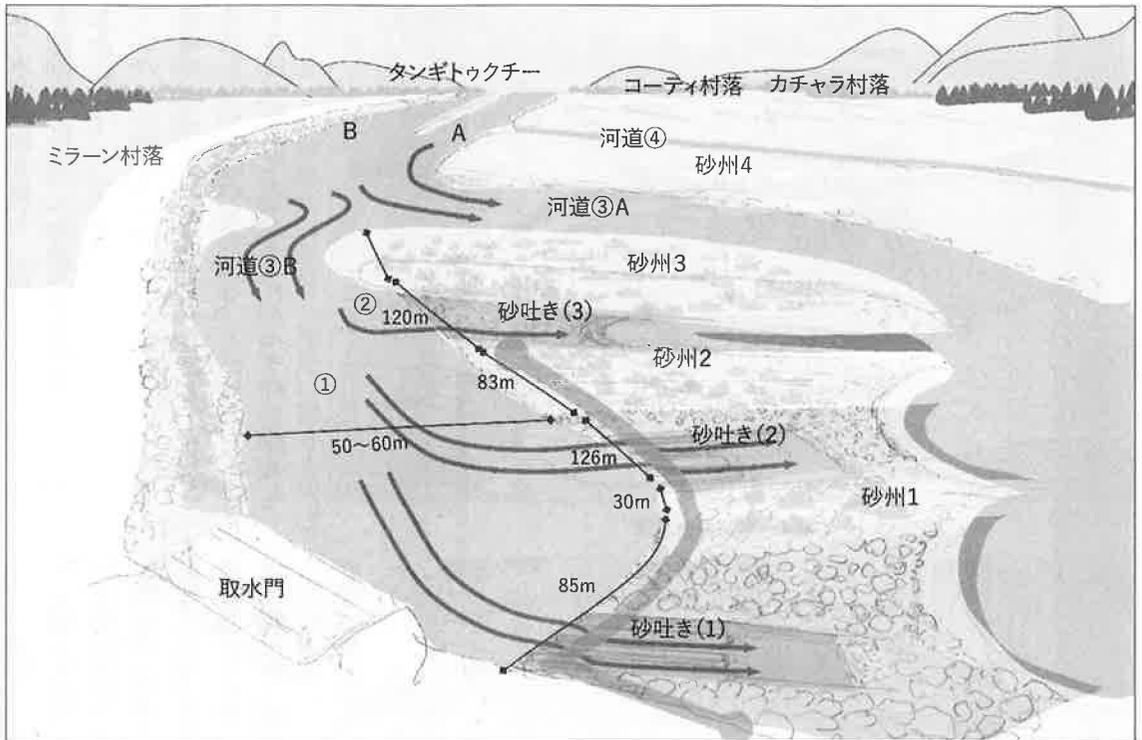
ミラーン堰は二〇一四〜一六年、JICA共同事業として建設され、現在二、五〇〇ヘクタールの農地を安定して潤す。それまでの斜め堰と異なり、河道変化が激しい場所での難工事であった。取水堰の設置場所は浸蝕が激しく、年々数百メートル後退しながら、遂に村落まで至り、約3kmに及ぶ護岸工事に加え、河道安定の工夫が凝らされた。この間、上流で分流が発生したり、砂州が移動したりで、河



堰幅444mのミラーン堰全景。取水口に向かう河道が安定するよう、護岸には多数の石出し水制が施された。砂州上にはヤナギによる粗朶（そだ）柵工が見られる。（2017年6月14日）

道整備の完成は延期されていた。

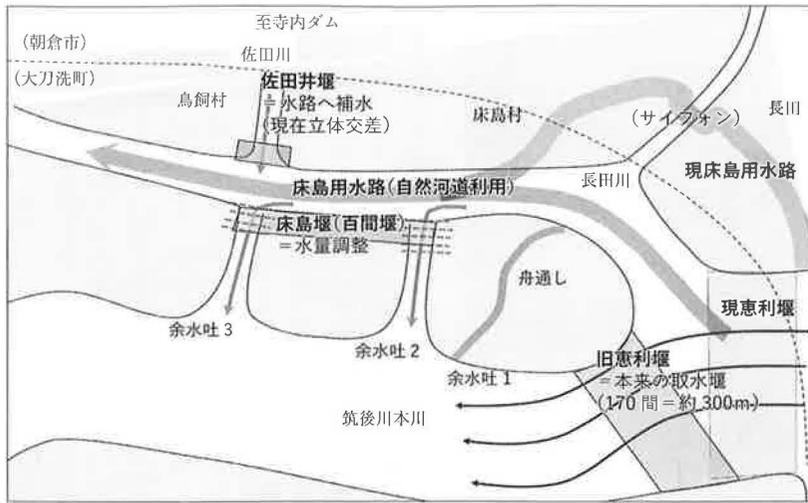
現在のカチャラ堰が約一〇km上流に置かれると、観察を続けながら計画が練られてきた。不安定河道の焦点は、ミラーン堰上流、約七〇〇メートル（カチャラ護岸8km地点）にある河床である。二〇一〇年の大洪水の際、膨大な砂利堆積が発生、幅二〇〇メートルの河床が著しく高くなり、ここを頂点として扇状地に類似した複数の河道、多列砂州が形成された。現ミラーン堰は、その比較的浅い河道の一つを固定させて取水している。このため、砂州を連続させて全体を堰に見立て、河岸側は膨大な巨



ミラーン堰概要 (鳥瞰図)



クナル河・ミラーン堰周辺河道と護岸工事



旧床島・恵利堰概念図



「筑後川地図」より恵利堰周辺

(1819年作成の絵図を1937年に模写したもの。久留米市中央図書館蔵)

礫で水制護岸を施し、水制端に沿って発生する深掘れを利用、小河道の安定を図った(5頁上下図参照)。

この「8km地点」は年々、対岸カチャラ堰流域のベラ村側で氾濫をくりかえし、新たな分流を作る傾向が見られる。この傾向を放置すれば、やがて大きな流れがベラ村を貫通し、

ミラン堰の取水が途絶える可能性が高い。完璧なものでないにせよ、対岸の氾濫と砂利堆積を避け、現河道の状態を維持するには、砂利吐き(≡洪水吐き)を備えた斜め堰が最も優れている。筑後川の恵利堰が、本河道の状態に酷似している。江戸時代に作られたが、山田堰と異なり、膨大な石材を主流に投じて、取

水というよりは、引き込み河道の水位を保とうとしたものらしい。複数の砂州を連結した点もよく似ている。現在はコンクリートの堰に変わっている。

実際の施工技術の上では、斜め堰の建設と大差はない。



中村 哲(たつ) 九州大学医学部卒。専門は神経内科(現地では内科・外科もこなす)。国内の病院勤務を経て一九八四年

パキスタンのカイバル・パクトウンクワ州(旧北西辺境州)の州都ベシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをベシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保(井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百余カ所以上)事業を实践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始。〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通。ダラエヌール診療所の年間診療数約四七、〇〇〇人(二〇一八年度)。

◎現地スタッフからの便り

二四時間、

無料で診察します

PMSダラエヌール診療所医師

ハフィズウラー

貧しい人々のために

私はジュマグルの息子で、ドクター・ハフィズです。

二〇〇五年にナンガラハル医学校を卒業し、同年PMSに医師として入職しました。最初の二年間はペシャワール病院で勤務しました。二〇〇六年にチトラールのラシュト診療所で働いた後、二〇〇七年七月にダラエヌール診療所に赴任し現在に至ります。ダラエヌール診療所での日々の活動について、少しお話し致します。

この診療所のカテゴリはBHC（ベリック・ヘルセンター）で、診療対象地域はダラエヌール地方のアムラ村とカライシヤヒ村で、人口は二五、八七二人です。しかし患者はダラエヌール全土からやってき

ます。それは我々が二四時間体制で診療し、質の良い薬剤を選んで処方しているからです。

診療所の役割としては、①一般外来診察、②検査、③ワクチン接種、④母子保健、⑤結核の診断および治療、⑥看護、です。

これらの医療サービスはアフガニスタンの貧しい人々のために、二四時間無料で提供されています。

日々の診察・検査など

毎日、まず朝礼で出勤者の確認をしたあと外来患者の診察を開始します。

【外来】外来患者の診察は、私とドクターハミドゥラーの二名の医師で行っています。診察時間は午前八時から午後一時までとし、女性と男性のセクシオンに分けられています。私は男性患者を、ハミドゥラー医師は女性患者の診察を担当していますが、互いに協力し合って働いています。

【検査】検査技師が二名おり、以下の検査を行っています。便・尿検査、血球検査、マラリア、リーシユマニア、妊娠検査、喀痰かくたんの抗酸菌塗抹検査等です。

【ワクチン】この部署にはワクチンのエキスパートが二名おり、以下のワクチンを当診療所で受けることが出来ます。

- ① 妊娠年齢女性への破傷風ワクチン
- ② BCG、B型肝炎、ロタウイルスワクチン、五種混合ワクチン、肺炎球菌ワクチン、麻疹はしか、経口生ポリオワクチン、不活性化ポリオワクチン（五歳位の児童向け）

【母子保健】助産師が一名おり、以下のサ



2014年にシェイワ郡から、地域への貢献に対して感謝状が中村医師や診療所職員たちに授与された。右端がハフィズ医師

ービスを提供しています。

① 出産前ケアと出産後ケア

② 家族計画及び分娩

【看護】看護部には経験の豊富な専門看護師がおり、彼らは小外科手術、外傷処置、注射ができます。

【結核診断／治療】検査技師二名のうち一名は結核専門で、国の結核プログラムでト

レーニングを受けました。感染予防のため別室を設けて隔離し、喀痰採取や検査を行っています。

最後に、ご支援くださる日本の皆さまに御礼を申し上げます。今後とも、困窮するアフガニスタンの人々のために、ご支援を継続していただけましたら、ありがとうございます。

職業トレーニングに感謝

PMS職員、現場監督

ヤールモハマド

用水路の恵み

私はアブドルガフルの息子でヤールモハマドといえます。PMSで働いています。

一九七九年、旧ソビエトのアフガニスタン侵攻によって、たくさんのアフガン人が家を失いました。この戦争によって引き裂かれた国で生きるのは本当に大変なことでした。多くの人が近隣諸国に逃げて行きま

した。私もその一人でしたが、アフガニスタンの状況が落ち着いた頃、二〇〇一年に故郷に戻りました。

しかし、食べ物や住むところだけではなく、仕事がないことにも苦しみました。二年間失業状態が続ぎ、経済的にも困難に直面しました。最終的に、私は再びアフガニスタンから隣国へ出る決心をしました。

その後、幸いな事にジャリババからガンベリ沙漠へと続くマルワリード用水路の建設が始まりました。この水路工事によって多くの人が仕事を得る機会に恵まれました。その結果、シェイワ郡の住民の多くがアフガニスタンにとどまることができました。私も二〇〇三年六月七日に雇用されました。

マルワリード用水路は多くの村落を通じて流れるようになりました。用水路ができ



蛇籠積みの作業員たちと打ち合わせをするヤールモハマド現場監督(中央)

る前、これらの村々では水不足に悩まされ飲み水もない状況でした。しかしマルワリード用水路完成後は、たくさんの未開墾地が農地に変わり、現在では上下流域の土地が開墾されてあらゆる作物が栽培されています。

技術を習得することが大切

懸命に働いてきた人は、専門技術者とし

(13頁につづく)

【特集】ハチミツの初収穫が行われました！



PMSガンペリ農場では初となるハチミツの収穫が行われた（2019年4月25日）



↑蜜蓋をそぎ落とし、溜まった蜜を取り出す。
 ↓分離機からゆっくりと流れ出る蜜を回収。笑顔のジア医師（右）とディダール技師。

→巣箱50個から約300kgのユーカリのハチミツを収穫。ユーカリ、オレンジ、ピエラと時期毎に異なる種類のハチミツを生産予定。将来的には巣箱200箱まで増やす計画だ。（2019年6月1日）





地図は『天、共に在り』(中村哲著/NHK出版)より転載し追記しています

◎カラー連載
マルワリード用水路を行く③
D地区
(1600~2350m地点)



マルワリードD地区の沈砂池。周辺にはヤナギやユーカリなどが植えられている (2010年3月29日)



アーチ状に造られたD沈砂池の三連送水門(2010年1月3日)



建設中のD沈砂池 (2005年3月10日)



洪水などが影響し、河の主流が国道を浸食。D地区近傍（2003年7月23日）



上写真のやや上流。水制を用い浸食を防ぐ（2006年12月3日）

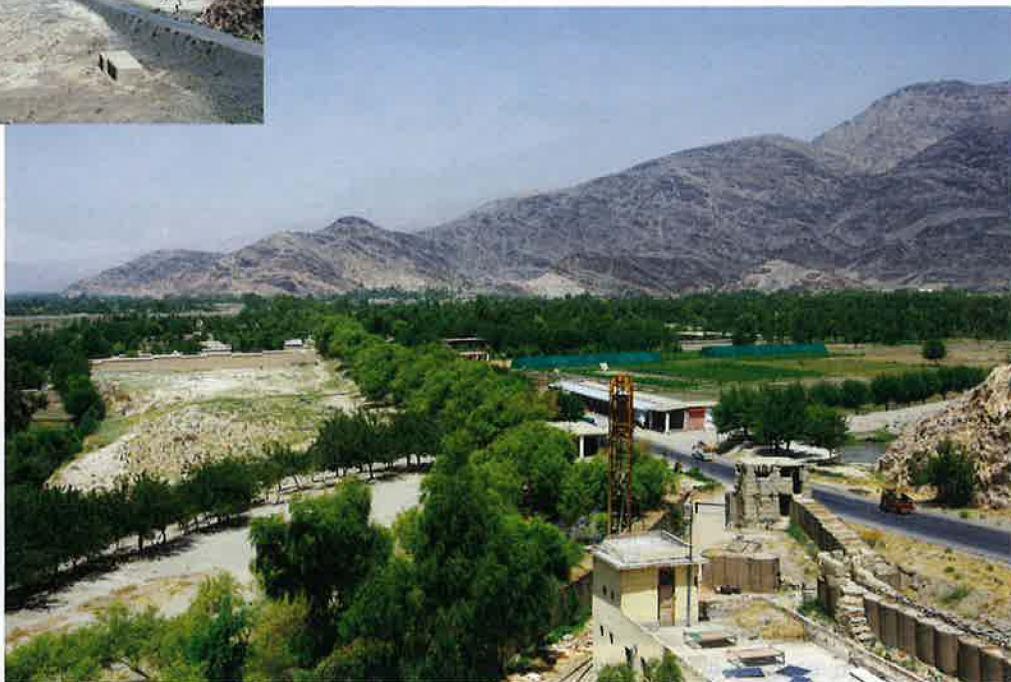


↑マルワリード用水路により水が引かれたカンレイ村の水田。今年はPMS作業地全体で水稻栽培が盛大で、印象では全耕地の40~50%を占める。溢れる緑と農地の目覚ましい拡大に一同励まされた(2019年7月3日)



←16年前のスランプール平野(2003年6月2日)

↓現在のスランプール平野。木々の緑が深くなっている(2019年7月3日)



て認められ、技術を伝達する教師としても PMS の重要な財産になっています。ドクター中村は、PMS の全職員に様々な職業トレーニングを提供してくださいました。私は蛇籠づくりのトレーニングを受け、多くの腕の良い作業員を育てて来ました。現在、彼らは蛇籠作りの技能を習得し、その技術によって立派に収入を得ることができています。

貧しかった

少年時代と現在

PMS 職員・エンジニア

デイダールムシユタク

子供たちの靴が買える喜び

私はデイダールと言います。一九七〇年にナンガラハル州の貧しい家庭に生まれました。五歳の時に小学校に入学しましたが、父には私の靴を買うお金がありませんでした。とても寒い日に裸足で学校に行かなければならなかった時、子供ながらにいつか靴を履いて学校に行きたいと願ったもので

蛇籠づくりのトレーニングを受けた我々以外の多くの者も、ドクター中村から建設工事、農業、家畜の飼育など様々な領域でトレーニングを受けています。そのお陰で今、我々はどこでも働けるようになっていきます。

中村(PMS)方式に基づくマルワリード用水路建設から得た経験をもとに、カシコート、シェイワ、シギ、ミラーン、カシマ

す。
何とか高校を卒業して大学(工学部)に入学できた時は本当に嬉しく、これからは国を愛し、母国の人々そして人類に奉仕していくことを切望しました。

在籍中、家庭の経済状況が悪いためにペンやノートを買うお金がありませんでした。そこで建設会社に行つて空のセメント袋をもらつて来て、その紙をノート代わりに使っていました。

大学卒業後、短期間PMSとは別のNGOで働きましたが、その後二〇〇二年にナンガラハル州で水源確保事業を開始していたPMSで働き始めました。

現在私には息子四人、娘三人、計七人の子供がいます。四歳の子以外は学校に行っています。PMSのおかげで自分の子供達

バード、カマI、カマII、マルワリードIIの堰・用水路が、PMSによって設計、建設されました。

私たちは日本の皆様のご支援に心から感謝しており、戦争の犠牲となったアフガニスタン国民への経済支援を本当にありがたく思っています。

数え切れないほどの感謝を込めて。



ラグマン州で用水路建設予定地の測量をするデイダール技師。マルワリード用水路に着工する前の様子と似ているとの感想(2019年7月3日)

に服や靴を買ってあげられることを嬉しく思っています。

カマ取水口整備プロジェクトについて

カマ郡には七、〇〇〇ヘクタールの農地がありました。PMS建設の取水口が出来る前は灌漑設備に問題があり、住民は十分な水を得られていませんでした。そこで、PMSがカマ取水口を設計し建設したところ、農地に十分な水が行き渡るようになりました。しかし冬の乾燥期には水路に小さな問題が生じて水不足になることがあります。

した。二〇一七年末に、ドクター中村の指示のもと、カマ取水口の調査を開始し大改修工事が計画され、二年後の今春に完成しました。現在、水路はどのような条件下でも十分な水を供給出来るようになっていきます。この取水口の改修には「PMS取水方式」が用いられました。

アフガニスタンの大統領は政府関係各省に対し、アフガン全土のすべての水路と取水口にPMS方式を用いるよう、行政命令を発令しました。工事に携わった者として誇りに思っています。

地域住民のために

暑さを忘れて働く

PMS職員、エンジニア

モハマド・ファヒーム・シエルザド

私はモハマド・ナイームの息子でエンジニアのファヒームと言います。

これまでナンガラハル州各地での、PMSの様々なプロジェクトで働いて来ました。PMSは、カーブル・ジャララバード間

の国道沿いのラグマン州カルガイ郡にあるアリアス・ヘイルの用水路のため調査を計画し、二〇一九年六月に調査員を選任しました。私もその中選ばれ、FAO（国連食糧農業機関）と共同で調査が実施されました。調査開始に当たって地域住民や州政府機関と協議をしたところ、本計画に大変満足してもらえ、協力を得ることが出来ました。

本調査はマシヤラ地域からソルハカン地域までの二八キロメートルに及び、四十日間の行程で行われました。また用水路の要素として欠かせないサイフォン、分水路、橋などについて調べました。

新しいテクノロジーを使った計器類、GPSやトータルステーションという測量機器を使用しました。

調査期間中は大変暑かったのですが、地域住民のために、という思いで夢中だったので、暑さを感じることはありませんでした。

中村先生の理念『誰も行かないところへこそ、我々が行き、そこで働く』を格言とし、これを支えにして私たちは日々働いています。



マルワリードII護岸工事現場で測量中のファヒーム技師（2019年9月4日）

アフガン訪問記

「人と自然の和解」を実感

日本電波ニュース社

谷津賢二

マルワリード用水路沿いの丘の上にて

二〇一九年四月。

アフガニスタンの強い日差しの中、私はマルワリード用水路沿いの丘の上に立ちました。私の眼前には鮮やかな緑の大地が広がり、心が浮き立つのがわかります。

私にとって今回の訪問は三年半ぶり、前回も同じこの丘に立ち、すでに緑に覆われた大地を見ました。しかし、今回は何かが少し違う感じがしたのです。その違いが「音」かもしれないと気付くのに時間はかかりませんでした。緑を渡る風に乗る、私の耳にさまざまな音が聞こえてきます。仕事をする男たちの威勢のよい声、遊ぶ子供たちの歓声、牛や鶏の鳴き声、そして小鳥のさえずり。こうした音と美しい緑は濃密な命の気配を生み出し、その気配に私は圧倒されていました。本物の農村が蘇ったのだと感じられたとたん、私の心は揺さぶられていたのです。これこそが中村医師とPM

S、ペシャワール会の皆さんが心に思い描いていた、人々の穏やかな暮らしなのだと思感したので。

その同じ時、自分が目撃してきた過去の光景を思い出していました。私は一九九八年に中村医師の活動を記録し始め、以来二年間、断続的にこの地の変化を見つめてきました。かつて、この地域一帯は干ばつと戦乱で、命の気配どころか、命そのものが奪われた大地でした。

私が記録したのは、ひび割れた大地と水なし地獄の中で為す術のない人々、その頭上を飛ぶ米軍ヘリコプターと荒れ野を疾走する装甲車の姿でした。その時、荒れ野が緑濃き大地に生まれ変わると誰が想像出来たでしょうか。

今、PM Sの用水路群は自然に溶け込み、静かに水を運んでいます。あたかも数百年前から途切れることなく水を運び続けた水路のように。

山田堰土地改良区理事長

徳永哲也さんと共に

今回の私のアフガニスタン訪問には映像記録以外にもう一つの役割がありました。

それは福岡県朝倉市の徳永哲也さんの現地訪問のお供をすることでした。徳永さんはPM S用水路取水堰のモデルとなった筑後川の山田堰を、およそ三百年間守り続けて

きた水利組合の理事長。中村医師の活動にさまざまな協力をしてきた方で、長年アフガニスタン訪問を望んでおられました。そして、今年ようやく訪問の機会が訪れたのです。

日本を出発し、四日かけてジャララバードに到着。まず、徳永さんと私が中村医師に導かれたのは、ガンベリ農場。今は麦が育ち見渡す限り緑の農場ですが、十年前まで沙漠だった場所です。写真や映像とは違い、自分の足で現地を訪れた徳永さんの感



荷台一杯に積んだ木切れを運ぶ手伝いをする村の子供たち(撮影:谷津賢二)



ガンベリ農場の麦畑 (2019年4月。撮影：谷津賢二)

激ぶりが私にも強く伝わってきます。その後、山田堰をモデルとした取水堰を訪れました。この季節にしてはクナル河の水量は多く、訪れたカマI堰もカマII堰もその姿は水の中、片鱗しか見えません。しかし、川面の激しい白波の下の、揺るがぬ堰の威容は十分に感じるができます。

ふと徳永さんに目をやると、それまで感激で饒舌になっていた徳永さんが本当に静かなのです。水門の端に立ちじっと目を凝らし、堰を見つめています。私はそっと徳

永さんに近づきましたが、黙ったままです。そして徳永さんの目に、薄っすらと涙が見えたのです。徳永さんたちが守り続けてきた山田堰が、時と場所を変え、アフガニスタンに生まれ、人々の命を支えている事実の前に、圧倒されていたのだと思います。今も安全とは言えないアフガニスタンに足を運んだ徳永さんの思いが、その後ろ姿から伝わってきました。

その後、徳永さんはガンベリ農場でオレンジの木の剪定方法を指導、日本のやり方にアフガン人スタッフは皆さん興味津々でした。農場では麦や野菜の栽培以外にもさまざまな取り組みが始まっています。

一つは徳永さんが指導したオレンジ栽培。すでに二万本の本が育ち、手入れと実りを待っています。いずれはオレンジの一大産地になる可能性を秘めています。

もう一つは養蜂。すでに巣箱も用意され、準備が整っていました。ミツバチたちが目指すのはオレンジの花。日本ではミカンの蜂蜜は少ないようですが、ガンベリ農場では有機栽培の広大なオレンジ畑があります。爽やかなオレンジの蜂蜜が味わえる日も近いでしょう。

徳永さんが山田堰の理事長であること、そして、アフガンのために何かをしたいというその一生懸命な姿に、アフガン人スタッフから深い敬意が示され、大歓迎のうち



10年前、2009年12月のガンベリ沙漠。撮影中の谷津さん

に十日間の訪問は過ぎました。

「人と自然の和解」とは

その間、私はあることを考え続けていました。それは、この十年ほど中村医師が静かに口にし、繰り返して書き記している言葉についてです。「人と自然の和解」。この言葉を私はアフガニスタンでも日本でも、何度も聞いてきました。しかし、私はこの言葉の真意をなかなか理解できないでいました。人と自然が和解するとは、どういうことなのか。「人が自然を守る」のでもなく、「人と自然が共生」するでもなく、「人と自

中村哲医師の著作等

アフガン・緑の大地計画

伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業 【改訂版】
Peace (Japan) Medical Services & ペシャワール会
B5判並製・256頁・オールカラー 1700円(税込)

以下はすべて本体価格(税別)です

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む
1800円

ダラエ・ヌールへの道 2000円

ペシャワールにて 1800円

辺境で診る辺境から見る 1800円

医者 井戸を掘る 1800円

医は国境を越えて 2000円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
電話092(714)4838

人は愛するに足り、真心は
信ずるに足る アフガンとの約束

中村哲/澤地久枝(聞き手) 2100円
東京都千代田区一ツ橋2-5-5
岩波書店 電話03(5210)4000

天、共に在り アフガニスタン
三十年の闘い

中村哲 1600円
NHK出版 東京都渋谷区宇田川町41-1
電話03(3464)7311

アフガニスタン DVD

用水路が運ぶ
恵みと平和

朗読 吉永小百合
2700円
ペシャワール会製作



ガンベリ農場を望む丘の上で。中村医師、パチャグル氏とともに(中央が谷津さん)

然が和解」する。
私は今回、思い切って中村医師に問うてみたのです。「人と自然が和解するとは、どういうことなのでしょうか?」と。中村医師はこう答えてくれました。「自然を人格と

捉えるべきだと思っています。ですから和解という言葉を使っているのです」と。
自然を物言わぬものとして捉えると、人間は自然から欲望のままに恵みを無限に奪い取る。しかし、自然に人格があると捉え、自然と対話し恵みの一部を

人が受け取らせてもらう。私は自分なりに「人と自然の和解」を、簡単ですが、こう理解しました。そして人と自然が和解することで初めて「未来の希望」が生まれるのだと感じたのです。
暗い世相、未来への不安がある中で、中村医師が進める活動と言説の中にこそ、力強い未来の希望を見るのは私だけではないと思います。

帰国間際、私はマルワリード用水路沿いの丘の上に再び立ち、緑の沃野をもう一度目にした時に気づいたので。これこそが「人と自然の和解」なのだ。

▼未使用の切手、書き損じハガキ(官製ハガキ・年賀ハガキ)をお送り下さい

*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使わせていただき大変助かっております。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承ください。よう、お願い致します。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

*ペシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです(払込用紙がついています)。ご希望の方は遠慮なく事務局にお申し越し下さい。パンフレットはA3変形を四折りましたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております(ポスティング等を行わないこととしております)。

用水路と女性たち

過酷な労働と感染症からの解放

PMS (平和医療団・日本) 総院長／ペシャワール会現地代表

中村哲

◎外圧でなく、納得できる言葉で

「報告に女性が登場しない」とよく言われるが、述べにくいには訳がある。

二〇〇一年、米軍がアフガニスタンに進駐して間もなく、性差別の問題が盛んに論議された時期があった。女性の地位向上が叫ばれ、女子児童の就学率から職業まで見直され、「イスラムの後進性」が盛んに攻撃された。国連や外国NGO(非政府組織)は女性職員の割り当てを増やし、率先して範を垂れた。

その直前までタリバン旧政権が女学校を禁止し、医師以外の女性の就労を制限していたからだ。折から性差別が世界的な問題になった時期だったので、権力を得て勢に乗った外国勢のキャンペーンは凄まじいものがあった。まるでイスラム教徒であることが悪いことであるかのような雰囲気さえ横行した。

我々PMS(平和医療団・日本)は「生命と水」を前面に掲げ、このような思想・文化方面の動きとは別の次元で動いていた。

米軍進駐を経た後、多くの「アフガン復興」の主題は「物心両面における近代化」と言えたが、旧ソ連の侵攻(一九七九年)以来、当地で進められた近代化の実態を眺めてきた身には、どこかで見た光景に思え、素直に同調できなかったのだ。

アフガン人にとってイスラム教とは人間の皮膚以上に密接なもので、生活の隅々までを律する精神文化だ。その中に女性の地位向上を肯定する考えがない訳ではない。外圧でなく、彼女たちが納得できる言葉で語られるべきだ。また、二〇〇〇年の大干ばつ後に襲ったあの飢餓地獄の中で、時流に乗り、権力を背景にこぶしを振り上げることに快からぬものを感じていた。

◎地縁と血縁が社会の全て

我々の作業地は、パシクトウン(パター)民族の世界である。パシクトウンはアフガニスタン最大の民族で、人口二千万とも言われ、パキスタン北西部にも一千万人が国境を挟んで住む世界最大の部族社会だ。少数山岳民族もいるが、圧倒的多数のパシ

クトウンと共に一つの文化圏を成す。「ワタシ(故郷)地縁」とカオミ(血縁)が社会の全て」と評されるほど、部族社会の様相を色濃く反映し、閉鎖的な農村は自治性が強く、実態は外部に伝わり難い。

このパシクトウン民族の女性の外出着が「ブルカ」で、顔付近に網目の窓を残した布で全身をすっぽりと覆う。厳しい男女隔離の掟があり、日本では刑が軽すぎる婦女暴行は普通、死罪である。

かつてパシクトウン民族で構成されるタリバンが、この衣装を首都カブールで強制して物議を醸した。西側では「女性抑圧の象徴」として一大キャンペーンが張られて過熱、パリなどでは公園の彫像にブルカを被せて擲撃し、被り物一切が禁止された。だが実はアフガン東部の女性の伝統的な外出着にすぎない。

元々「個人」や「自由」という考えはアフガン農村で薄かった。血縁・地縁社会の中で、いかに家族全体の安泰を図るかが関心事だ。男も女も、子供も、それぞれに役割を担ってその文化の中で生きていた。それを性急に変えようとした旧ソ連は反発を招き、大混乱を残して撤退した。一方、抵抗勢力を「自由の戦士」と呼び、大量の武器援助で内戦を泥沼化させた西側のマキャベリズム(目的のために手段を選ばないやり方)は、人道支援にさえ不信を招いた。

表紙写真によせて

用水路通水の小さな目撃者たち

2005年3月4日、現場スタッフや地元の作業員、共に働く日本人ワーカー、ジャララバード事務所やペシャワール病院から駆け付けた職員たちが見守る中、マルワリード用水路D池の三連水門の堰板がはずされ、E、F、G地区へ送水が開始された。水が先へ進むにつれ、村の子供たちや大人たちが「ウブ、ウブラジー」（水だ、水が来た!）とだんだん集まって水の流れに併行して走り始めた。そのうちに用水路に飛び込んでしゃぎまわる子たち、けしの頭を棒で繋げた自家製のおもちゃを水の流れに合わせてコロコロ押している子、用水路の中を歩く中村医師をおそるおそる取り囲んで群れ歩く子たちも。自分が造った箇所を無事に水が通るかドキドキしている日本人ワーカー達をよそに、子供たちは水の中でそれぞれに喜びを表している。頃合いをみてスタッフがターフィー（鮎）をひとつかみ空にむけて「ムバーラク!」（おめでとう）とまくと、ワーッと大人も子供も、スタッフもどきどきに紛れて、一斉に笑いながら、しかし我先にと拾い集める。用水路の通水に立ちあったこの小さな目撃者たちが、今は二十歳過ぎの青年になっている。

重要なのは、温かい人間的関心

カブールのような大都市を除き、多数の女性たちが自ら権利を求めて叫ぶことは少なかったと思う。物言わぬ農村の女性にとって、最も過酷な労働は水運びである。炎天下、水がめを頭に乘せ、時には数キロの道程を一日中徒歩で往来する。泉があちこちで涸れた現在、遠くの川まで行くが、濁流はすぐには使えない。大きな水がめに入れて一晩泥を沈殿させてから利用する。貴重な水は煮沸して料理や茶に使う。薪は高価なので、のどが渴けば川の水をすくって飲む。赤痢や腸チフスなど致命的な感染症

も起こしやすい。

我々が手掛ける用水路はこの水汲み労働と感染症の危険から女性たちを解放した。用水路沿いの地下水位が上がり、涸れ井戸が悉く復旧し、木がのびのびと育つ。家の近くから何度でも水が汲め、育つ木々は薪を提供する。用水路事業を誰よりも支持したのが彼女たちだった。実際、作業中に近所の家から「母からです」と子供たちが茶を届ける光景がしばしば見られた。気軽に異性に話しかける風習がないので、主婦たちが子供を代役に感謝を表したのである。診察室で診療するとき以外、我々が彼女たちと親しく話す機会はない。おそろく、い

【PMSの動き】

- (1) 6月1日、ガンペリ農場の養蜂計画で初の蜂蜜を収穫しました。
- (2) 7月、ラグマン州で用水路建設候補地の一次調査が終了しました。
- (3) 上記調査のため休講していたFAO関連事業のトレーニングが7月28日に再開されました。
- (4) 8月、犠牲祭の祝日で農業事業の他は1週間休業しました。
- (5) JICAの招聘で9月8日～15日まで、ジア医師、ディダール技師、ファヒーム技師、アジュマル技師が来日し、朝倉市で水利、農業視察・研修を行います。

つ実現するか分からぬ「権利」よりは、目前の生存の方が重要であったのだろう。必要なのは思想ではなく、温かい人間的関心であった。

全ての者が和し、よく生きるためにこそ人権があるとすれば、男女差を超え、善人や悪人、敵味方さえ超え、人に与えられた恵みと倫理の普遍性を、我々は訴え続ける。

〔西日本新聞〕二〇一九年六月十七日朝刊より転載

●事務局だより

*八月二八日未明から北部九州は記録的な大雨に襲われました。一日二四時間で平年の八月一ヵ月分の雨が降った地域もあります。福岡は八月初めまでは水不足が懸念されていきました。気候変動、降雨偏在を実感させられます。冠水した佐賀県の武雄や大町の映像を見ると胸が痛みます。被災された皆様に心からのお見舞いを申し上げますとともに、速やかな復旧を切にお祈りいたします。

*二〇〇三年に着工した「緑の大地計画」は、皆様のご支援により、一つの区切りを迎えようとしています。今後の課題の一つは、最初期に工事を行なったマルワリド用水路の改修、再ライニング（水路床覆工）などで、これによって設備維持方法の伝授も可能になります。また、水利施設の普及活動については、FAO（国連食糧農業機関）などの協力を得て訓練所で研修を行なっています。中村医師によると、遠方から来た研修生は、「ここに来て、希望があることを知りました。私も希望を持って帰ります」という言葉を残して地元に戻っていったそうです。

ヤールモハマド現場監督が書いているように、PMSで十五年以上も水利施設に携わった人は専門技術者で、彼らはどこでも働くことができます。アフガン各地でPMS方式の堰を建設したいという要請があれば、PMSが入札の上で請け負う——そんな将来も夢ではないようです。

*九月中旬に、現地よりジア院長補佐や現場の実務担当者が来日、朝倉などで測量や農業の訓練を受けます。多くの方のご協力をいただきますことに感謝いたします。

*谷津賢二さんはDVD「アフガンに命の水を（品切）」「干ばつの大地に用水路を拓く」「用水路が運ぶ恵みと平和」の撮影・監督を務められました。

DVDのご注文を事務局で承ります。

*払い込み票に「何があっても ただ水やり：（感激したので、おまけ）自分の心にも ただ水やり」と記されていました。ありがとうございます。

●PMS支援室より

*今年、ベスード郡、シェイワ郡、カマ郡の至る所で水稻栽培が盛大におこなわれています。これほどの広範囲な水田の出現はおそらく史上初の事です。これから更に拡大すると期待されます。

日本がお盆の間、今年も現地もイーデ・クルバ（犠牲祭）に入りました。この期間だけは争いを断ち、祈りを捧げ、羊を食べ、天へ忠誠を誓い、貧しい者へ施しをします。家族と一緒に過ごす現地職員の写真を見て、遠いアフガニスタンの地に想いを馳せながら日々働いております。

◎村から

*本年一月に逝去された画家・甲斐大策さんの遺作展が六月上旬に開催され、盛況のうちに終了しました。会員の方々も多数お見えになり、遠方からも足をお運びいただきました。甲斐さんは会報二五号から三〇年近く、描き下ろしの表紙画と物語を提供して下さい、会報担当者として公私共にお付き合いが続き、東京から居を移された後は、毎号福岡のお宅まで原画を預かりに行きました。もてなすは大連時代からの甲斐家の流儀だったので、「編集者なんて、どうせロクなもの食ってないんだから」と、いつもマントウやカレーを仕込んで歓待して下さいました。食後は決まって中国茶でした。完成した表紙画の前に、紫煙をくゆらせながら「絵解き」する甲斐さんの口調はアフガンへの愛と畏敬に満ち、該博な知識と長年の旅の経験に裏打ちされていました。日本人離れた風格と眼光の奥に宿る優しさを懐かしく偲びつつ、ご冥福を祈るばかりです。（F）

会 則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州（現バクトゥンクワ州）ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカールの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとられず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局を
〒八二〇一〇〇〇三 福岡市中央区春

吉一六一八 VEGA天神南六〇一
TEL〇九二七三二一三三二内におく。

総会、現地報告会は、原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。